書評

中砂明德著 中國近世の福建人 ——士大夫と出版人——

高津 孝

本書は、以下のような構成となっている。

序說
第一部 福建士大夫と官僚社會
　第一章 劉後村と南宋士人社會
　第二章 明末の閩人
第二部 歷史教科書と福建人
　第三章 教科書の埃をはたく——『資治通鑑綱目』再考
　第四章 不肖の孝子——『少微通鑑』
　第五章 『通鑑』のインブリード——「綱鑑」
結語

初出は、序說の第二節が「士大夫のノルムの形成——南宋時代」（『東洋史研究』五四-三、一九九五年）であり、第一章が「劉後村と南宋士人社會」（『東方學報』六六册、一九九四年）である。また、著者「後語」によれば、第二章は、「動亂の時代と南人」（中砂明德著『江南：中國文雅の源流』（講談社選書メチエ）第五章、講談社、二〇〇二年）を敷衍したものであり、第二部の第三章、第四章、第五章は、「埃をかぶった教科書」（週刊朝日百科『世界の文學』中國歷史書編、一〇三號、二〇〇一年）「通鑑一族の繁衍」（『江南：中國文雅の源流』第三章）を大幅に增補改稿したものとなる。

序說の第一節は、本書全體への概說である。著者は、長江以南、中でも長江中・下流域が文化的に突出したのは、一七世紀以降であり、それ以前は、長江以南の地域文化を「コロニーの文化」と見なし、獨自性をもったものとは認めない。宋代において、長江以南は進士合格者數で北を壓倒し始めたが、トップに來るのは長江中・下流域ではなく福建であること、福建が商業と科擧において宋代にめざましく發展したことが指摘される。しかし、これまでの福建への主たる關心は、交易によって活性化された地域發展史であり、第一章は、それを補う目的で、南宋の福建人としての劉克莊が取り上げられ士大夫層の動向を叙述する。また、福建人の科擧での成功と中央政界における地位のギャップは宋代だけの問題ではないとして、第二章で、明代における福建人の中央官界における問題が檢討され、さらに、「海國」福建における倭寇の問題を取り上げる。第一部のポイントは、宋代から明代にかけて通時的に福建の變遷を追うというアプローチはとらないこと、著者の關心は、福建人の語りの中から、中國全體における福建の位

置をさぐりあてることにあるとされる。第二部は、『資治通鑑』のダイジェスト版に焦點を當て、「裏方」の福建人である建陽の書肆の動向に分析を加えるとする。第三章は、『通鑑綱目』が編輯されてから、その普及版である「七家注本」が成立する明代中期までの約三世紀にわたる歴史をたどったもの、第四章は、『通鑑』節本としての『少微通鑑』に再檢討を加えたもの、第五章は、明末建陽出版者の最大手余象斗が作った『大方綱鑑』とそのライヴァル本を比較することで「綱鑑」の特徴を浮き彫りにしたものとされる。

序説の第二節は、著者によれば、知のパッチワークとも言うべき類書を思想史の文脈に位置づけることを目的としている。ここで著者は、見出しのもとに關係記事を集める形態の書物をすべて類書スタイルと廣く考えている。南宋では、科擧志願者の增大に應じて、科擧を勝ち抜くための受驗參考書として、文章を格によって分類した工具書、類書が數多く作成されたが、著者によれば、これらは「テクネーへの希求」という時代精神を體現したものとされ、『三體詩』『朱子語類』『通鑑綱目』など、詩歌アンソロジー、思想書、歴史書、各種カタログ類にまで廣がる同時代現象として語られねばならないとする。こうして著者は、南宋社會おいて、科擧志願者數の激增と、諸々の世界を一望のもとに領略したいという人々の希求の強さの中で、「士大夫のノルム」が形成され、南宋滅亡後も、士大夫に骨がらみとなってまとわりついたと主張する。本節の內容はラフなスケッチに止まり、說得力を有するためには本書第二部のような厚い記述を必要とする。また、本書第二部では『通鑑綱目』について詳細な分析がなされるが本節の內容との關聯は述べられていない。

第一章は、福建出身の劉克莊（一一八七-一二六九）、號後村を取り上げる。劉克莊は、南宋後期の著名な文人、政治家であるが、これまで注目されることは少なく、詩人、學者としての再評價があるだけで、十分な研究がなかった。著者は、劉克莊について、時代を生きた士大夫・官僚として彼を取り上げた研究がほとんど無かった點、北宋を對象とした『續資治通鑑長編』、南宋前期を對象とする『建炎以來繫年要錄』といった充實した編年資料を缺く南宋後期において、質量ともに一級の史料である『後村先生大全集』一九六卷が十分に活用されてこなかった點を指摘し、「後村の傳記を中心にすえながら、彼が多面的に描き出した南宋後半の官僚社會像を描き出すことを目的」として本章を叙述している。著者の結論は、劉克莊は、南宋末年の風潮を受けた「時代の子」であり、「淺く廣くという知の在り方」を有し、「朱子學の公認により道學色が濃くなる中で、彼は「涉獵」を主とする都會派のディレッタントであり續けた」人物であったとされる。また、劉克莊を含む南宋士大夫が、史彌遠の宰相時代に不遇感を味わい、理宗の端平年間に新しい時代の到來を夢見たが挫折し、それ以降、王朝が衰微に向かっているという共通認識を有したこと、南宋政府に期待しながらも裏切られるという受動的態度に終始したこと、その背景として、士大夫たるもの、皇帝の恩遇に報いるべきという使命感を彼らが有したこと、士大夫の意見を政府に反映させるべきとする力がこのとき南宋社會になかったことを指摘している。

第二章は、前半と後半に分かれる。前半では、閩人（福建人）が明朝政府に於いて疎外され、宰相、大學士という最高位の官僚

に出世できなかった點が指摘される。それ故、萬曆三五年（一六〇七）に李廷機、葉向高の二人の閩人が同時に内閣大學士になったことが驚きを以て迎えられたことが示される。閩人が大學士になることは、二百年ぶりだったのである。ところが、實際には、閩人の科擧での成績は優れている。したがって、閩人の側で、閩人が特に官界で疎外されているという不遇感、閩人自身に身内を助けようとする聯帶感のない點が共有されていたことが指摘される。閩人自身はその理由を「性直諒」「正義の孤獨」にしばしば歸するが、著者は、當時、現實には閩人が官界で擡頭してきていたことから、閩人自身の過大な期待とそれが滿たされないことへの不滿を不遇感の理由として擧げている。著者は、第二節で、統計資料を用いて、その原因を探求している。結論としては、閩人はやはり科擧に強いこと、福建一省というより、その中の特定の地域（興化、泉州、福州）が極めて強力であることが確認される。また、科擧の合格後の官界においてはどうか。科擧合格のトップスリーについては確かに高位高官に登るものは少ないことが顯著であり、それ以下の合格者についても、江南、江西に水を空けられている點が指摘される。殘念ながら、この問題についての考察はここで終了し、官僚機構の構造分析に基づく他地域との比較、出身地域によって異なる地域戰略が存在したのか否かなど、福建の特異性を明らかにするための論述は行われていない。

本章の後半は、明代末期における倭寇の問題、琉球問題、鄭芝龍の問題について、董應擧（一五五七-一六四三）によって殘された史料を中心に、當時の福建士大夫間に交わされた書簡類を讀み解くことで當時の狀況を浮かび上がらせている。著者によれば、明末の閩人の活動を通して彼らがいかなる歷史的境位に置かれていたかを探るという方法をとったものである。現實に倭寇問題に直面する福建における政策決定、對應の樣子、その情報の擴散の樣子が活寫され、明代末期の東アジア海域交流史研究に資するものと考えられるが、既存の研究に暗い讀者としては、中央政府の動向とリンクした分析を加えて欲しかった。

第二部に配された三章は、著者が「後語」において「この本に投入したエネルギーの九割がたは、こちらに向けられている」と述べるように、本書の中心部分をなす。北宋・司馬光『資治通鑑』から派生的に成立してくる厖大な歷史教科書テキスト群について、『資治通鑑』以降、その最末端を形成する『通鑑』系俗書に至るまで、具體的な歷史記述の内容に分け入って詳細な檢討を加え、整理を試みたものである。

第三章では、『資治通鑑綱目』についての檢討が行われる。『資治通鑑』二九四卷は、北宋の司馬光によって、紀元前四〇三年（周・威烈王一二三年）から、紀元後九五九年（後周・顯德六年）までの一三六二年間の編年通史として編纂された。その後、南宋の朱熹および朱熹の弟子達によって、『資治通鑑』の内容を簡略化し、「綱」（大要）、「目」（細目）のヒエラルキーのもとに歷史事實を整理したものとして『資治通鑑綱目』五九卷が編纂される。著者は、過去の『資治通鑑綱目』評價を代表するものとして、清朝の『四庫全書總目』における『資治通鑑綱目』の提要を引用するが、そこにはすでに『資治通鑑綱目』の問題が露わになっている。『四庫全書總目』は、康熙帝のコメントを附した『御批通鑑綱目』についての提要となっているが、その『資治通鑑綱目』自

體、單獨で存在するのではなく、後續する厖大な二次テキスト群を內に含んでいるのである。すなわち、尹起莘の「發明」、劉友益の「書法」、王幼學の「集覽」、徐昭文の「考證」、陳濟の「集覽正誤」、馮智舒の「質實」、汪克寬の「考異」であり、合わせて七家注と呼ばれる。さらに『通鑑』以前の時代を對象とする「前編」、以後の時代を對象とする「後編」が附されている。著者は、『四庫全書總目』への批判を出發點として、殘存する諸テキストを檢討しながら、こうした複雜な內容のテキストの成立を順次說き明かしていく。

從來の見解、たとえば、清朝の『四庫全書總目』では、朱熹の『資治通鑑綱目』への關與を低く見る、すなわち『資治通鑑綱目』はほとんどが弟子たちの創作に關わるものとするが、著者は、編輯過程、編輯協力者に着目した葉建華、湯勤福の研究を受けて、朱熹の關與を認める立場に立つ。また、『朱子語類』に見られる具體的な弟子達との會話から、朱熹の正統論が弟子たちに十分理解されていなかった點、正統論で重要になる三國時代についても、朱熹の見解には若干のぶれが見られる點を指摘する。次に、宋元代における『資治通鑑綱目』の出版狀況を整理した後、類書における『資治通鑑綱目』の扱われかたを檢討する。類書は、科擧の參考書として受驗に役立つ事項を手際よく樣々な書物から拔き書きしたものである。取り上げられたのは、林駉『新箋決科古今源流至論』と章如愚『山堂先生群書考索』で、宋代から明代にかけて福建の建陽で何度も出版されたヒット商品とされる。著者は、前述の朱熹自身の正統論の搖れとは對照的に、類書においては、國家公認のテキストとしての『資治通鑑綱目』の安定性が強調される點を指摘する。

次に、著者は、七家注の七家について順次檢討を行うが、その檢討は詳細を究める。七家は著名な人物ではなく傳記もはっきりしない場合が多いが、著者は關聯する資料を搜しだし、その『資治通鑑綱目』に對するスタンスを明確にし、編輯者の意圖によって、その內容が切り貼りされていく樣子を叙述する。最初に取り上げられるのが、尹起莘の「發明」である。尹起莘は宋代にあって無名の人物で、「發明」の作者として以外の事實は知られていない。「發明」は、金陵の制置使である別之傑によって朝廷に上申されたとされ、當時の學界における有力人物魏了翁の序文が知られている。しかしながら、その序文には尹起莘との關聯を示す內容は記述されておらず、經歷、著書についての情報も缺いている。內容は殆どが『通鑑』と『綱目』の紹介で、「發明」は、本書が普及すれば「綱目の忠臣」となるだろうと記されるのみである。しかも、この序文は魏了翁の文集にのみ殘され、『綱目』には附されていない。著者は「七家注」形成の過程での樣々な取捨選擇に編輯者の意圖を見ていく。この序文も看板としての意味を持ったが、內容の問題によって排除された可能性をいう。また、「發明」に附記される形で、獨自の正統論を主張する明・丘濬『世史正綱』が加えられていることを指摘する。「發明」が無い場合は「書法」に、それも無い場合は「目」に、時には、丘濬の名前が消えて尹起莘の發言として加えられるのである。ここにも編輯者の意圖が現れている。尹起莘は、『綱目』を『春秋』と同じレベルの、一字一句ゆるがせに出來ない經典として見ており、ただひたすらその「發明」に努めた。その結果、無名の學者の著書

でありながら『綱目』に附隨して生き殘ることが出來たのではないかと著者は指摘する。

次に、著者は「凡例」の問題を取り上げる。「凡例」は、『綱目』の統系、歲年、名號、卽位などについてその表記の原則を示したものである。したがって、これを基準として、朱熹が『綱目』に込めた意圖を理解することが出來る。ところが、「凡例」は宋元の刊本には存在せず、明版になって始めて出現する。著者は、「凡例」について語る宋元期の文獻を檢討し、さらに「凡例」と「考異」「考證」「書法」の關係を具體的な歷史記述について檢討、分析し、種々の序文等に僞作の可能性のあることを浮かび上がらせる。

次に、著者は、七家注『通鑑綱目』以前の『綱目』合注本である『文公先生資治通鑑綱目』諸本を取り上げる。著者に依れば、『文公先生資治通鑑綱目』は建陽の書肆である劉剡が編輯の主體であり、「集覽」を中核とし、そこに「發明」「考異」「考證」「集覽正誤」が加わり、合注本の基本ライン五注本が形成された。その後、江西の提學であった黃仲昭（閩の人）によって、江西の劉友益の「書法」が加えられ、六家注本となり、建陽の書肆である愼獨齋の劉弘毅によって「質實」が加えられ七家注が完成したとする。なお、「發明」「書法」「考異」「考證」は、『綱目』の筆法に關するものであり、「集覽」「集覽正誤」「質實」は、「目」の語句の注釋である。

第四章は、『少微通鑑』を取り上げる。『少微通鑑』とは、北宋末年の人とされる少微先生江贄が著したとされる『資治通鑑』のダイジェスト版で、後世の流布本の母體となる明代宣德年間の建陽刊本のフルネイムは『少微家塾點校附音通鑑節要』である。江贄自身の著作かどうかについては疑問が殘るが、江氏一族の著作であろうと推定され、最古のものとしては元刊本が知られており、元代に行われ明代に建陽の書肆である劉剡、王逢によって普及したとされる。『少微通鑑』は、同じく『通鑑』の節本である『陸狀元增節音註精議資治通鑑』を剽竊したものとの說があるが、著者は對比調査を行い、その說を否定する。宣德本『少微通鑑』は、建陽の書肆である劉剡が中心となって編纂したものと著者は推定している。從來の『少微通鑑』との相違點は、附錄については、「歷代帝王傳授總圖」、「讀通鑑法」、元・潘榮「通鑑總要通論」、司馬光の曾孫である司馬伋「通鑑釋例」の附加である。また、本文については、元の至治刊本において旣に附加されていた、『通鑑』以前の歷史で、黃帝から始まる、劉恕の『通鑑外紀』に加え、さらに「增義」として、盤古から黃帝までの歷史を、明・陳桱「世編」を骨子として附加している。また、『少微通鑑』に存在しない宋元代については、劉剡によって『通鑑節要續編』が作成されている。その宋代部分については、基本的に明・陳桱『通鑑續編』の大書部分に從い、他書も參照し適宜編輯を加えている。元代部分については基本的に明・張美和『元史節要』に據っている。劉剡獨自の追加部分として、文天祥、謝枋得の記事がある。著者は、宰相であった文天祥に比較して、重要な地位に就いていない謝枋得を特に取り上げているという點を、建陽との關係に歸している。謝枋得は、宋滅亡後、建陽で占いや家庭敎師をして生活し、弟子達は建陽の出版界で活躍したことを指摘している。また、劉珙、劉韐、劉子翼、劉頒という、建陽の書肆である劉剡の一族に

ついての記事が挿入されていることも指摘される。

劉剡の編輯によって、『少微通鑑』は、『通鑑』の範圍を越えて、「外紀增義」「節安續編」を加え、太古の時代から宋元代まで一貫した通史リレーの完成を見ることになった。これが次章で扱う「綱鑑」に引き繼がれることになる。また、著者は、『少微通鑑』が『通鑑』『綱目』の單なる節略ではない點を指摘している。『通鑑』『綱目』は年代記としての本質を持っており、年代を飛ばして記述することはない。しかし、『少微通鑑』では、四、五年が飛ばされたり、違う年の記事が一箇所に集められたりしており、年代記の範疇から踏み出している。科擧に役に立つという視點からは、歷史書は人物エピソード集、名言アンソロジー集であって良いという觀點からの編輯となっている。著者は、そこに科擧參考書としての性格を見る。

第五章は、「綱鑑」を取り上げる。「綱鑑」は、著者によれば、前章で扱った『少微通鑑』及び『通鑑節要續編』に『通鑑綱目』を加算し、名家の評語を加えたものであり、萬曆年間以降流行したとされる。錢茂偉『明代史學的歷程』（社會科學文獻出版社、二〇〇三年）「明代綱鑑類圖書表」では、『中國古籍善本書目』によって三四種を擧げる。しかし、「綱鑑」は、本文自體が諸本によって厚薄に差があり、簡略なものから七〇卷の大部のものまで存在することから、著者は系統樹を描くことの困難さを指摘する。うち、「綱鑑」類の一大群を形成する二〇卷本系統のものについては、卷數が少ないだけでなく、本文の量も少なく、「論策」「名賢定論」という先人の史評に重點があり、歷史教科書というより參考書に近いとして、考察の對象から外している。

「綱鑑」のルーツについては、王重民の說の訂正からはいる。王重民は、司禮監刊『少微通鑑』に注と評を增補したものが吉澄校刻本『新刊憲臺攷正少微通鑑』で、それに基づいて余象斗本『鼎鍥趙田了凡袁先生編纂古本歷史綱鑑補』が刊行されたとする。これは、「綱鑑」のルーツを司禮監刊『少微通鑑』という明の內府刻本に歸する見解である。著者は、司禮監刊『少微通鑑』が後繼諸本に影響を與えたことのないこと、吉澄校刻本は先行する『少微通鑑』に據ったこと、吉澄校刻本に基づいた余象斗本は、第三刻の『歷史綱鑑補』（萬曆三八年刊）ではなく、第二刻の『大方綱鑑』（萬曆三二年刊）であることを指摘する。こうした檢討を經て後、著者は「綱鑑」のルーツを『新刊古本大字合併綱鑑大成』四六卷（明・唐順之輯、明隆慶書林歸仁齋楊貝壽刻本）と推定している。理由は、「合併綱鑑」という名稱と最古の刊行年を有することである。

次に、余象斗本『大方綱鑑』（萬曆三二年刊）を取り上げ檢討する。『大方綱鑑』の本文の母體は『少微通鑑』であること、そこに「發明」「書法」を大量に引用して『通鑑綱目』の色彩を強めていること、『少微通鑑』に比べて評語の多いことが「綱鑑」の特色であること、『大方綱鑑』の注の分量は相當多いが、そのかなりの部分は『少微通鑑』『通鑑綱目』の遺產であることが指摘される。したがって、『大方綱鑑』は、『少微通鑑』を骨組みとして、『通鑑綱目』本文を加え、「考異」「考證」を除いた「五家注」で肉附けしたものとされる。著者によれば、明代において、『通鑑綱目』が意味を持ったのは、「凡例」の存在に依るところが大きく、それを補強したのが「考異」「考證」であった。それを

行ったのは建陽の出版者であったが、『大方綱鑑』に至って、朱子學歴史觀の具現化という『通鑑』系俗書の性格は希薄化されることになったとされる。

著者によれば、評語の増量が『少微通鑑』と「綱鑑」を分かつ特徴の一つとされる。「綱鑑」は、『史記評林』『漢書評林』などに代表される、明代に様々なジャンルで刊行される評林本の一種とも言えるのである。議論文の大量挿入は『通鑑綱目』の特徴であるが、「綱鑑」は『少微通鑑』に『通鑑綱目』を加算することで、諸儒の議論が大量に取り込まれることになった。著者によれば、そこには歴史の見方の指南という教育的配慮が見られるとする。「綱鑑」に最も頻繁に登場するのが南宋初年の胡寅『讀史管見』で、それに次ぐのが宋・范祖禹『唐鑑』である。『讀史管見』は、現在では評價は高くないが、宋から明にかけての歴史評論の代表作とされたという。著者によれば、『讀史管見』刊行者である愼獨齋を經由して挿入されたものという。『通鑑綱目』經由以外の評語として、胡寅に次いでよく出てくるものに、明・丁奉（丁南湖）がある。官僚として大成した人ではないが、文人としては知名度があった人物とされる。彼の評語は、著者によれば、卓論はないものの、比較的公平でバランス感覺があり、明・丘濬のように夷狄だからといって、その行爲を全否定するといった過激なところは見られないとされる。次いでよく出てくるのが丘濬で、彼の『世史正綱』からの引用である。著者によれば、その內容は、中華の男儒者たちが抱いてきた蔑視を濃縮したような議論を展開して、強烈な個性を放っているという。當時はあまり世に行われなかったようで、「綱鑑」に引用されることで、廣まったようである。以上は、『大方綱鑑』における傾向であるが、著者は次に同じく建陽の書林熊體忠によって刊行された『玉堂鑑綱』との比較を行っている。『玉堂鑑綱』では、丁奉、丘濬の引用は『大方綱鑑』に比べて少ないが、全體的に明人の議論を多く引用している。著者は、『玉堂鑑綱』卷六-九に引かれる明人の議論を調査し、四〇人以上の明人を抽出している。その內、「綱鑑」の書名によく登場する名前「蘇濬、唐順之、王世貞、黃洪憲、葉向高、袁黃、李廷機」についてはほぼ僞託であろうと推定している。また、それ以外の人物についても、丁寧にその出典を探っているが、裏附けの取れないものも多く、名前を借りただけの可能性を指摘している。一方、『玉堂鑑綱』に比べると『大方綱鑑』に引用される明人はバラエティに乏しく、正編ではほぼ丁奉、丘濬、趙弼の三人が殆どを占めると指摘する。余象斗本の第三刻『歴史綱鑑補』（萬曆三八年刊）は、『玉堂鑑綱』のにぎやかな明人評を「餘唾を採り、すでに名筆に非ず」と批判するが、著者によれば、『歴史綱鑑補』の取った對抗措置も大差はないとする。

『歴史綱鑑補』で最も引用數が多いのは袁了凡であるが、著者は、これが明・陳絳『金罍子』に載る史評からの改變揭載であり、「袁了凡曰」三六〇餘條すべてが『金罍子』を來源とする僞託であることを明らかにしている。著者は、余象斗がこのアイデアを思いついたのが、『玉堂鑑綱』への對抗心であったと推定している。『玉堂鑑綱』自體、編者の葉向高の評は少なく、無名の人物である李京の評が明人の中で一番多い。また、著者によって編輯者の可能性が指摘される同じく無名の人物である劉朝箴の評もあり、こうした有名人でない人物の評が『玉堂鑑綱』の新鮮味で

あったという。『大方綱鑑』を意識して『玉堂鑑綱』が作成され、『玉堂鑑綱』に対抗して『歴史綱鑑補』が作られたとするのが、著者の描く構圖である。

次に本文の問題を取り上げるが、著者は、唐の李世民のクーデターとして有名な「玄武門の變」を取り上げ、比較を行っている。まず、「綱鑑」の前提となった『資治通鑑』から、『通鑑綱目』『少微通鑑』の流れを見ると、『資治通鑑』の記事に對し、『通鑑綱目』は、「文辭を縮めつつも、話柄はできるだけ拾って、決斷にいたるまでの李世民の心の搖れ、幕僚たちの動きをフォローしている。一方、『少微』にはそうした關心がない。讀み物として話が最低限通るようにしながら、いかに字數を刈り込めるかにこそ關心があるから、ニュアンスをばっさり切り捨てることを意に介さない」とされる。『少微通鑑』を受けた「綱鑑」では、『玉堂鑑綱』の方が『少微通鑑』を忠實に引用する傾向があるのに對し、『大方綱鑑』はしばしば省略を行っている點、『大方綱鑑』の方が『通鑑綱目』を強く意識し「發明」「書法」の挿入が非常に多いのに對し、『玉堂鑑綱』の方はそれほどでもなく、『通鑑綱目』による增量は多いがその挿入はかなり機械的であると指摘している。

一方、參考とすべき「本家」の無い『資治通鑑』『通鑑綱目』前後の時代は、どうなるのか。著者は、『資治通鑑』に當たるものとして、劉剡の加工した「外紀增義」『節要續編』、宋代については『通鑑續編』の存在を擧げる。また、『通鑑綱目』に當たるものとして、宋元について、明朝政府が作った『續資治通鑑綱目』をあげる。ところが、『資治通鑑』以前の部分については權威に寄りかかることができず、自由裁量が大きい點、各「綱鑑」において差異が大きいことが指摘される。

『續資治通鑑綱目』は成化十二年（一四七六）に完成するが、『通鑑綱目』に對して尹起莘の「發明」が著されたように、『續資治通鑑綱目』に對して、無名の人物である張時泰によって、弘治元年（一四八八）に『續綱目廣義』が朝廷に獻ぜられる。さらにその十年後に、やはり無名の人物である周禮によって「續綱目發明」が獻ぜられる。兩者は、愼獨齋によって『續資治通鑑綱目』に組み込まれて出版され、それが「綱鑑」へと流れ込むのである。

著者は、數年を平氣で飛ばして記述する『少微通鑑』が編年史書としては問題があり、それに比べて『大方綱鑑』『玉堂鑑綱』が元代を除けば年代記という點で良心的な部類に屬し、かつ、評林としても機能している點を評價している。それは、論文對策を中心に据える他の「綱鑑」とは大きく異なる點である。しかし、「綱鑑」は何故次々と出版され續けたのかという點では、評の多さに對する當時の需要を指摘している。また、建陽出版業の特徵として、「綱鑑」に顯著に見られる安直な材料の切り貼りを擧げ、明代という書物についての省資源の時代の中で、比較的資源に惠まれた建陽のあり方として着目する。さらに、「綱鑑」の最大の意義が、一つのタイトルのもとに中國通史を實現し、普及力を持たせた點にあったと主張する。

第二部は、北宋・司馬光『資治通鑑』から派生的に成立してくる厖大な『通鑑』系の書物を、特に科擧參考書としての通俗歷史教科書群を中心に、明代末期の「綱鑑」に至るまで、書肆の活動を焦點において分析したものである。通俗歷史書は、科擧の參考書として一括され、これまで分析の對象とされることはなかった。

歴史事實へと向かう歴史學の一般的な傾向からは、それは二次的資料であり、また朱子學的歴史觀による再編、解釋を經た思想的資料であった。著者は、これまで十分に考察されて來なかったこれら厖大な『通鑑』系書物群を、分析の對象として取り上げ、具體的な歴史記述のあり方にまで踏み込んで檢討することで、その成立、展開を跡づけ、極めて大きな成果を擧げている。特に、これまで指摘はされてきたが、具體的には不分明であった、序文、注釋の著名文人への僞託の問題、序文の改編、はめ込みの問題、本文の切り貼り作業、また、それらと具體的な書肆との關係を、厖大な資料を博搜し詳細に分析したうえで、解明している點は高く評價される。明代社會史研究、明代出版史研究における大きな成果と言えるものである。したがって、こうした著者の作業、結論は同じく科擧參考書として厖大な量が殘されている四書系の書物群の研究へと大きな示唆を與えるものとなる。

本書は、書名に「中國近世の福建人」と掲げるように、福建についての研究となっているが、なにゆえ福建を取り上げるのか、福建の獨自性は如何なる點に存在するのかという點は必ずしも明確に論じられてはいない。それは何より、他の地域との比較考察を缺き、中國社會全體の構造の中での福建の位置づけが讀者に十分明確な形で提供されていない點に起因するものであろう。著者の個々の事實についての分析は詳細を究めるが、その構造の解明、背景說明、中國社會全體における位置づけ、中國史全體における位置づけは行われないケースが多い。スポットライトを浴びる對象は極めて鮮明に讀者の目に入ってくるが、背景は闇に沈んだままである。

本書を讀んで感ずることは、ここ三十年ぐらいにおける研究環境の大きな變化である。中國全土についての古典籍目錄が編纂され、さらには日本や歐米での漢籍收藏狀況が明らかになり、どこにどういう書物が有るのかがかなり明確になってきた。また、多くの貴重な古典籍が陸續と出版され、以前には見ることが出來なかった書物を目にすることが可能になってきた。著者自身の努力も高く評價されるが、研究環境の變化から受けた恩惠も大きい。一方、著者は過去の研究者に對し極めて嚴しい態度を取っている。しかし、現在においても、多くの書物を目にすることの出來る、また、複寫物を入手し比較對照を行える惠まれた環境に誰もがいるわけではない。限られた條件の中で得られた成果は、不十分であっても貴重な成果と認めるべきであろう。

また、本書では、しばしば主觀的色彩の強い表現で、過去の歴史的人物の行動について價値判斷を加えている部分がある。こうした點は、現代の通俗的倫理觀を押しつけているだけではないかと受け取られるおそれが懸念される。當時の社會が有する構造が生み出したものとして、歴史的展望の中において見るべきであろう。

二〇一二年二月　名古屋　名古屋大學出版會
A五判　五＋五六七＋一七頁　六六〇〇圓＋稅